

都 退 教 協 だ よ り

No.294号

2020年2月12日発行

東京都退職教職員協議会 会長 柴田 廸春

〒101-0003 千代田区一ツ橋 2-6-2 日本教育会館 2F 東京教組内

☎:03-5276-1311 FAX:03-5276-1312 Mail:totaikyokyo@tokyokyouso.org

年金が0.2%上がります。

私たちの年金は、物価と賃金の動向によって改訂されます。厚生労働省は、1月24日、今年の年金改定率を公表しました。

今回、物価変動率は、プラス0.5%でしたが、名目手取り賃金変動率がプラス0.3%でした。この場合、低い方の賃金変動率を年金の改定率に適用します。

しかし、年金が改訂され上昇する場合、マクロ経済スライド（次世代の年金確保のために年金を段階的に低く抑える制度）が適用さ

れます。今年はマイナス0.1%が適用になり、差し引き0.2%の年金アップになりました。平均的な世帯で国民年金65,141円（+133円）、厚生年金220,724円（+458円）になります。

昨年も0.3%のマクロ経済スライドが適用されたので、0.4%（約2,000円）の年金が抑制されたこととなります。消費税増税が社会保障に反映されていないことを痛感します。

千鳥ヶ淵で、お花見しませんか！

新型コロナウイルスの感染拡大が心配される中、梅のたよりも聞かれる季節になりました。

恒例の都高教退職者会との共催「お花見の会」を下記のとおり行います。安倍首相の桜を観る会とは一切関係ありませんので、安心してご参加ください。

コースは、花見の名所「千鳥ヶ淵」を散策します。皆さん奮ってご参加ください。

日 時 4月1日（水）午前11時

集合場所 千鳥ヶ淵戦没者墓苑
・六角堂前

※例年通り、花見のあと、2～3000円の予算で

懇親会を開きます。

皆さまの参加をお待ちしています。

当日の連絡は、柴田会長 090 - 6700 - 7087

谷口事務局長 090 - 5202 - 0117



渡邊純さん、中村哲さんの死に思う

片桐健司

千葉の渡邊純さんが亡くなった。脳性まひで、たん吸引などの医療的ケアが必要な人であった。小学校も中学校も普通学級に通った。小学校では、学校の対応のひどさに、純さん自らが登校拒否をして学校に抗議するということがあった。それでも頑張って小学校を卒業し、中学校では多くの友だちに囲まれ、楽しく思い出深い中学校生活を送った。

そして、県立高校へ行くべく受験したのだが、6年間で27回落とされた。そのうち25回は定員内不合格であった。受験生の数が学校の募集した人数を下回っていたにもかかわらず、彼だけが入学を認められなかった。今度こそはこの春の受験を目指していたそんな矢先の急な死であった。

なぜ、彼だけが落とされるのか。そこには、高校に入っても高校生としての学習はできない(適格者主義)という校長判断によるものだ。

高校生としての学習ができないというが、私もそうだったからあえて言う。ほとんどの人が、高校の学習にはついていけない。仮りについていけたとしても、高校で学んだことがどれだけ実になっているかといえば、あまり実になっていない。勉強面で言えば、高校の学習に「適格」という人はそんなにはいないのだ。もし校長が適格者主義を主張するなら、ほとんどの人を落とさなければいけないだろう。しかし、他の人は合格にし、定員が満ちていないにもかかわらず純さん一人を落とすのは、純さんに「障害」があるからだ。そこにあるのは、障害者差別以外の何物でもない。

小中学校もそうだが、高校でも、学んでも分からないことはたくさんある。でも、分からないから学んではいけないのではなく、分からないから学ぶのだ。しかも、学びとは、教科の

学びだけではない。そこに友だちがいれば、その友だちと出会うことも、また素晴らしい学びだ。純さんが友だちから学ぶこともあるだろうし、友だちが純さんから学ぶこともたくさんある。

純さんの葬儀には友だちがたくさん来ていたという。

モリだ、カケだ、サクラだと嘘ばかりついて自分の身を守り、部下に尻ぬぐいをさせているような人と、この純さんの友だちと、どっちが人として大切なものを身につけているか、考えなくても分かるだろう。

勉強ができればいい、できないヤツはだめだという学力信仰が、人間をダメにしている。高校で学びたいという純粋な思いの純さんを拒む。こんな社会、学校だから、嘘つきばかりがえびる世の中になってしまう。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」

これは、中村哲さんが亡くなったときに思い浮かんだ聖書の言葉だ。純さんにも同じ思いを持つ。純さんの死を無駄にしてはいけない。純さんの思いがたくさんの実を結ぶように、残された私たちも歩んでいきたい。

中村哲さんが亡くなった。心に強い衝撃を受けた。今でも信じられない。個人的な話で申し訳ないが、彼は、私と同じバプテスト派の教会のクリスチャンであった。そんなことで、私は、彼の働きから見れば何もしていないに等しいかも知れないが、わずかばかりの支援をしてきた。

彼は、偉ぶらず高ぶらず、淡々とその仕事をしてきたように思う。何か特別なことをしよ

うとしたわけではなく、ひとりの医者として、人間として、目の前にいる人とどうやっていっしょに生きていこうかと思ってやってきたのだと思う。

しかし、彼が仕事場として選んだ場所は、あまりにも命の危険のあるところだった。そういうことは、当然彼もわかっていただろうし、覚悟もしていたかもしれない。でも彼は、そこで仕事をするのが与えられた仕事だと思っていた。その地域の人たちといっしょに生き、

その地域の人たちの喜ぶ顔を見ることが彼にとって生きが이었다かも知れない。

彼の死をどう受け止めたらよいか、あれこれ思う中で一つの聖書の言葉が浮かんできた。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」(ヨハネによる福音書 12章 24節)

彼は、武力で平和は来ないと言っていた。その地域の人たちが安心して暮らせる状況をつくるのが、大切だと。

安倍改憲を許さない！

学習院大学教授 青井美帆さんの講演要旨

1月23日、地方公務員退職者協議会(地公退)の学習会が開かれ、学習院大学大学院法務研究科の青井美帆さんが「安倍改憲を許さない」と題して講演されました。以下に、その要旨を掲載いたします。

1、現状として

- ・第201回通常国会召集
- ・日米安保条約改定から60年
- ・安倍政権による「権力の私物化」
——安定した政権支持率

こうした中で、誰に向かって、何を語るべきなのか

2、「立憲主義」

～権力の抑制：憲法に従った政治

明治期以来、「立憲主義」とどう向かい合ってきたのか？

「立憲主義」は開国期以来、エリート層に受容されてきたが、必ずしも国民が主役ではなかった。これのバージョンアップを図っていくべきではないのか。

1875年(明治8)立憲政体樹立の詔がだされた。

1885年(明治18)内閣制度

(太政官制から内閣制度へ転換)

1889年(明治22)2月11日大日本帝国憲法制定

1890年(明治23)第1回帝国議会開会

～1918年(大正7)原敬内閣～

曲がりなりにも政党内閣へ

1925年以降「憲政擁護運動」衰退・周縁

1931年(昭和6)「満州事変」

1932年(昭和7)「5.15事件」

犬養首相暗殺、軍部の発言力強まる。

1936年(昭和11)「2.26事件」

1937年(昭和12)「日中戦争」

1940年(昭和15)政党解体、

大政翼賛会成立＝議会政治の終焉

*権力の統制という観点でみるなら、権力の代名詞である軍事を、通常政治(「国務」)が制御できなかった事実を改めて受け止めるべきではないか。

*タッチできない領域としての「統帥」～実力組織をどうコントロールするか：脈々と今に通じている。

3、9条の構想と国際法

* 国際法と9条 9条は武力行使の原則違反の国内法化と理解できる。「集団的自衛権」は行使できない

4、日米安保条約：日米安保体制（日米同盟）

—「憲法番外地」（米軍—「いつでも・どこで

も・いくらでも」)

5、「憲法改正」を「阻止すれば大丈夫」ではない—法制度の問題として2014年に戻らねば意味がない

(柴田記)

カンパ御礼

安倍改憲阻止・沖縄新基地建設反対・脱原発・台風被災支援などにとりくむ「日退教闘争カンパ」に多くの会員が応えてくださいました。ありがとうございました。

カンパしてくださった方々（敬称略）

・安部東明・今関規子・及川輝治・川島みつよ・川角恒・坂本長則・佐久間忠夫・佐々木貴世子・佐藤睦・柴田悦・柴田廸春・島村誠・竹田武司・武田好永・武本和代・竹山諭・谷口滋・土井彰・

中村光夫・生井栄一・浜口由利子・日比野正道・深澤裕・藤崎喜仁・前田直也・繭山紀子・山崎大輔・秋元清高・有賀由美・石岡佳子・石橋厚彦・小栗尚文・小澤公夫・加藤智・小山都・榊原実・重富壽美子・鈴木忠雄・高橋昭志・伊達和子・鶴田芙紗子・内藤貴子・深澤和子・藤井友子・藤崎みどり・別所勝也・堀井潔・前田文生・水越苑枝・村田明夫・望月美江・山中宇田子・由井鉄也・横山愛子・若山雅男・和田芳子

編集後記

- ◇ 年金は、わずか0.2%の微増にとどまりました。一方、医療・介護などは軒並み負担増が検討されています。中でも、75歳以上の医療費窓口負担2割へ引き上げ、介護保険利用者負担2割へ引き上げは高齢者を直撃します。
- ◇ 新型肺炎の拡大が心配され、マスクや手洗いなども広がり、日本ではインフルエンザの流行が抑えられているという。一方、「米国でインフルエンザが猛威を振るっている。米疾病対策センター（CDC）によると2019～20年のインフルエンザシーズンは患者数が1900万人、死者数は1万人を超えた。世界で新型コロナウイルスの感染拡大が懸念されるなか、米国ではインフルエンザが大きな脅威となっている。」（日本経済新聞・2月6日）
- ◇ 感染症の歴史は差別の歴史でもある。「ハンセン氏病」への差別を反省したばかりである。差別の感染ほど怖いものはない。もちろん防疫は大切だが、新型コロナウイルスの恐怖をあおり中国系、アジア系の人々に対するヘイト、差別、デマも急速に拡大している。差別の感染も食い止めたい。
- ◇ 新型肺炎の拡大に乗じて自民党内で「緊急事態条項」を改憲項目に入れるべきという意見が強まっていると聞く。改憲しなくても緊急事態には対応できることは自明であり、火事場泥棒に他ならない。
- ◇ 幼児教育・保育無償化がスタートするが、またしても朝鮮幼稚園をはじめ外国人学校幼稚園を除外する。許せない差別です。同封の署名にご協力を！（谷口記）